

年間第三十二主日

2013.11.10

ルカ 20・27-38

先週の日曜日には、例年のように、皆様からお寄せいただいた亡くなれた方々のお名前を祭壇にお掲げし、心を合わせて追悼の祈りをおささげいたしました。今日の 9 時半の御ミサでは、幸田司教様をお迎えして堅信式が行われますが、その後、これも例年のように府中墓地への墓参を行います。このような教会のいわば年中行事は、11 月が教会では死者の月と定められているからです。教会の一年の典礼の暦は王であるキリストの祭日をもって締めくくられます。典礼の暦の一年の最終の日曜日に祝われる王であるキリストの祭日の前の 11 月を死者の月とする教会の伝統には深い意味があります。王であるキリストの祭日は十字架の死を超えて復活されたイエス・キリストが天に昇って、神の右の座に着かれたことを祝う祭日です。典礼暦の一年の最後の主日に教会は王であるキリストの祭日を祝い、主イエス・キリストが十字架の死と復活によって、この世に生きる私たち全ての者のために開いてくださった永遠の神の御国への信仰を新たにし、そのような信仰に基づく希望が与えられていることを祝うのです。王であるキリストの祭日を迎える 11 月の死者の月、私たちは洗礼によって与えられているこの信仰と希望を新たにして、今やこの世のいのちを終えて神の御国に旅立たれた全ての死者のために祈ります。私たちの主イエス・キリストが約束してくださった、神のみにとにおける永遠のいのちの喜びに全ての亡くなられた方々が迎え入れられるように私たちのカトリック信者としての信仰によって祈るのです。この祈りにおいて、私たちは全ての亡くなられた方々と結ばれて、その方々を私たちが信じる全てのものの救い主イエス・キリストのあわれみに委ねて祈るのです。

亡くなられた方々のことを想って祈りをささげるとき、私たちは何を願って祈っているのでしょうか。私たちの周囲では一般的に「ご冥福を祈る」というふうに表現しますが、キリスト者である私たちが亡くなられた方々のために祈る「冥福」のありかは、天地の創造主、全能の父である神のみもとにあります。そこにこそ全てに満たされた、何一つ欠けたところのない永遠のいのちの幸せがあると私たちは信じています。天地万物を創造された神が目指されたのは、神に創造されたものたち全をご自分の安息に与らせることです。神に創造された全てのものが、神の安息に与って営むはずの樂園における安らぎに満ちたいのちのありようは、創造主である神の意図に反する、私たち人間の罪によって失われてしまいました。「お前のゆえに、地は呪われるものとなった、お前は生

涯食べ物を得ようと苦しむ。・・お前は顔に汗を流してパンを得る、土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵に過ぎないお前は塵に帰る。」という、神に背いたアダムに対する創世記 3 章の神のことばは、そのまま、私たちのこの世におけるいのちのありようを示しています。樂園を追われた者として、この世の生を生きる私たちは皆、やがては死なねばならない者たちとなったのです。ここに集う私たちは皆、愛する者との死別の悲しみの中で、このような私たちの人間であることの現実の悲哀を体験いたしました。

けれども、そのような悲しみの中で私たちは同時に自分がキリスト者であることの信仰のありがたさを他のどの時よりも感じ取ることが出来たはずです。

いのちの創造主である神は、私たちの罪深さにもかかわらず、私たちを死の闇の中に見捨てたままにしようとはなさらないとの希望を、自分が信じる信仰の中に見出すことが出来るからです。キリスト教の信仰は、それが私たちにもたらすこの希望にかかっています。十字架につけられて死んで葬られ、陰府に降り、三日目に死者の中から復活されたイエス・キリストは、弟子たちのもとを訪れ「あなたがたに平和」と呼びかけられました。復活されたイエス・キリストが弟子たちに告げられたこの平和こそ、十字架の死に至るこの世の苦悩の人生を生き抜き、その全ての苦しみに打ち勝って、いまや父なる神の安息の中におられるイエス・キリストの平和です。師と仰いだイエスの悲惨な十字架の死に遭遇して失意と混乱の中にある弟子たちはこの復活の主の平和に与ることによって、新たないのちの息吹を受けました。復活の主イエス・キリストの新たないのちの息吹の中で、弟子たちはイエスの十字架の死が彼らにもたらした悲しみを越えて、復活の主イエス・キリストとともに歩む、死を超えた新たないのちの地平に向かって歩み始めたのです。

私たちが受けた洗礼は、イエス・キリストによってもたらされた、死を超えた復活のいのちの息吹の恵みを私たちに与える教会の秘跡です。洗礼志願式の儀式書の中には、司祭と洗礼を受ける人との間で交わされる次のような問答があります。「あなたは教会になにを求めますか。」この問に対して洗礼を受ける人は「信仰を求めます。」と答え、それに続いて司祭はさらに「信仰はあなたに何を与えますか。」と尋ね、洗礼志願者は「永遠のいのちを与えます。」と答えます。洗礼に先立つこの問答は、洗礼が復活の主イエス・キリストによってもたらされた、死を超えた復活の永遠のいのちの恵みを私たちにもたらす教会の秘跡であることをよく表現しています。キリスト者としての信仰を生きるということは、洗礼によって与えられたこのような恵みを自覚的に受け止め、それによって開かれた死をも超える永遠のいのちの希望の地平に向かって、イエス・キリストの教えに導かれつつ、この世の生を生きるということです。

私たちに先立って、この世の務めを終え、神のみもとに旅立って行かれた方々

のために祈る時、私たちはその方々が、全てのいのちをその永遠の安息に与らせようと望んでおられる神の懐に抱き迎えられることを願って祈るのです。死者たちのために祈るとき、私たちはイエス・キリストによって私たちにもたらされた、復活の永遠のいのちの恵みにあらためて目覚めて祈るのです。そのように考えるなら、亡くなられた方々のために祈るということが、私たちのカトリック信者としての信仰を生きる上で、とても大切な、大きな助けを与える務めであることが分かります。

9時半のミサの中で堅信の秘跡を受ける方々とともに、洗礼の秘跡によって与えられている私たちのカトリック信者としての信仰に基づく復活の永遠のいのちへの希望を強め、新たにする恵みを、堅信の秘跡によって今日私たちの教会の上に注がれる聖霊に祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高